

# ロシア人から見た道元の『正法眼蔵』「現成公案」

——ロシア語訳にあたって——

スベタラーナ・ミハイロワ

## 1. 「現成公案」の心

道元（1200-1253）は人生の円熟期<sup>1)</sup>に『正法眼蔵』「現成公案」巻を選述している。この巻は、今から 775 年前、1233 年の中秋の日（旧暦 8 月 15 日、満月の日）に示したものである。和漢混交の古語で書かれており、時代の違い、言葉の違いもあり、現代人が理解することは大変難しい。また、言葉は理解できても、そこに示される深遠な意味を読み解くとなると、簡単なことではない。

しかし、この巻に示された道元のところと、文章の魅力はさらに伝わってくる。しかも、最初の言葉から最後の一節まで、一貫した内容で統一されており、何ともいえない緊張感を保っている。その言葉は、明確な意味を読み取ることは確かに難しいが、経典や語録からの引用文や、それに対する解説の部分がないので、リズムカルな心地よさを感じさせてくれる。

道元はこの巻で仏法に対する自らの考えを凝縮して述べているように思われる。このような特徴は、宗教的な表現の中でキリスト教の場合、告白または懺悔あるいは告解の様式に相当する。もう一つの特徴として、詩的また対句表現も多く、道元の幼い頃から持っている文学才能が知られる<sup>2)</sup>。

道元の美しい表現を、直訳でなく、意識によって現代ロシア語で道元の魅力を理解してもらいたい。そのための手がかりになったのは、古代の文学と歴史の専門家であるセルギエンコ・マリヤの翻訳である。彼女は聖アヴグスチノスの「告解」をラテン語から現代ロシア語へ翻訳して高い評価を得た<sup>3)</sup>。聖アヴグスチノス（354-426）は、その「告解」によりキリスト教の理解を伝えた。セルギエンコのロシア語訳も心に打たれるおだやかな表現で、言葉と考えを一致させた翻訳の傑作となった。この翻訳のお陰で 1500 年前のキリスト教修行者のところが現代人にすんなり受け入れられ、感動を与えたのである。アヴグスチノスの現代ロシア語訳は、時代ギャップを乗り越えており、時間を超越するということではなく、

古代を振り返るという形でなく、時代と関係なく、人間の求道を一筋に追究しまとめている。

道元もアヴグスチノスと同様に、仏道のあり方を示す選述の中で、生と死の意味や人と神または仏との関わりを説いているが、道元の場合、その意味での悟りに重点を置いて「現成公案」巻を『正法眼蔵』の第一巻（七十五巻本・六十巻本）として編集している。私は「現成公案」巻の趣意を「悟り」であると考え、ロシア語訳のタイトルを「悟の詩」（さとのうた）とした。「さとり」という言葉は、日口辞典<sup>4)</sup>により、理解能力又は敏感さの意味である。ロシア語に該当する禅の専門用語辞典がまだないので、研究者は英語の enlightenment または realization をロシア語訳にするケースが多い。これはロシア語で просветление（プロスヴェトレニエ）に該当するが、禅の専門用語として身に付けてもらうことを意図して、そのまま日本語の さとり (サトリ) を用いた方がよいと考えた。

## 2. 「現成公案」の現代ロシア語訳の例

「現成公案」巻を読むと、仏教用語の解説と並び、それ以外の事例のエピソードが幾つか述べられている。この事例は五つほどある。一つには花草、二つには水月、三つには薪灰、四つには烏魚、五つには風である。その事例は自然界の事象を表している。それらの比喻が、諸法・万法・仏道・諸仏・自己・身心・修証等の仏教用語の間に挟まれて示されている。その組み合わせを見ると、経典というより、何かのストーリーのようなまとめ方と思われるほどである。

最初の花草の例は、諸法の仏法なる時節には迷いと悟りがある、また修行、生と死があるというところから、そのような考えがない「われ」には迷、悟、諸仏、衆生、生、死がないところまで展開して、仏の道がそのような区別を超越していると道元は述べている。その次の行には

しかもかくのごとくなりといへども、  
花は愛惜にちり、草は棄嫌におふるのみなり

と示している。何故、道元はこの文書を入れるのであろうか。この花草の部分は次の部分とも関連が見えない。

自己をはこびて万法を修証するを迷いとなす、  
万法すすみて自己を修証するはさとりなり。

このような展開から「現成公案」の難しさが始まる。

ここで道元が「花草」という比喻を示した理由は、ごく普通の自然現象を譬に

## (22) ロシア人から見た道元の『正法眼蔵』「現成公案」(S. ミハイロワ)

挙げることによって、理解をしやすくしようとしたものと考えerことは当然の見方である。道元は、冒頭に示した説示が一般の人に解りにくいところがあると感じて、理解の架け橋となるように譬話しとして日常生活にある花や草の話を挙げたのである。この「花」、「草」の譬は、仏の教えは自然と同じであり、われわれの日常生活の中でのあり方や、そこにおける感情と同様、当たり前のこととして身につけることが必要である事を示したのではないかと思われる。ここには道元の独特な思想が現れている。その「草花」の部分 私は以下のように翻訳してみた。

Все это также как в любом цветке  
Есть красота и увяданье,  
Как в пышной зелени травы  
Мы чувствуем досаду

仏の教えは  
自然そのもの、草花と向き合うように  
素直に  
受け入れるものだ

以上、まとめるなら、道元はここで、人が法に向き合う姿を表現している。

その後に出てくる水月、薪灰、鳥魚の比喻は悟りを表現している。悟りというのは、禅思想の歴史においては、通常、言葉で表現できない独特なものであるとされる。しかし道元は「現成公案」巻の中で、悟りに新しい視点を与えて進展している。道元は、悟りを、水月、薪灰、鳥魚などの自然現象に譬て描写し、これらの譬、つまり言葉を用いて悟りを表現しようとするのである。水月という譬は「心」（意識又は認識）のあり方として、中国禅において見られるが、道元がいう悟りとは、不思議な世界ではなく、まさに自然のありのままのあり方、あるいは現象の中にあるのであり、それをそのままに受け取ることにあると考えられる。それは以下の説示にうかがわれる。

人の、さとりをうる、水に月のやどるがごとし。月ぬれず、  
水やぶれず。ひろくおほきなるひかりにてあれど、尺寸の水にやどり、  
全月も弥天も、くさの露にもやどり、一滴の水にもやどる。

私はこの部分を次のようにロシア語訳してみた。

Благодаря Сатори человек подобен свету,  
Отраженному луной в воде:  
Луна осталась прежней и  
поверхность водоёма тоже.  
И как бы ни был свет луны велик  
Он отразится полностью в воде

人は、水に月が  
映るようにさとり。  
月や池の表面は変化なし  
月の光は大きくても  
すべてが水に映る

## ロシア人から見た道元の『正法眼蔵』「現成公案」(S. ミハイロワ) (23)

И небо и луна все разом выйдут  
В малюсенькую капельку росы.

空も月も一気に草の露に  
全部すべて映る

悟りの姿をはっきりさせるために、道元は、悟りというものは、水に月が映ることに妨げないのと同様、人も悟りを妨げることが出来ないと述べている。その意味は、悟りとは、自然の現象のようにありのままをありのままにうけとるのであり、人が雨が降ることを妨げないのと同じように、人も悟りをうるものであり、そこには「わざ」のようなものがないということの意味をしているのではないかと思われるのである。悟りのあり方を、さらに道元は、鳥魚の事例を挙げて示している。

以水為命しりぬべし、以空為命しりぬべし。以鳥為命あり、以魚為命あり。  
以命為鳥なるべし、以命為魚なるべし。このほかさらに進歩あるべし。  
修証あり、その寿者命者あること、かくのごとし。

|                                  |             |
|----------------------------------|-------------|
| Как знает рыба, что она погибнет | 太洋の際を出れば死ぬと |
| Когда достигнет края океана,     | 魚が知っているように、 |
| Как знает птица, что она умрёт   | 境を越えれば死ぬと   |
| Когда перелетит за грань         | 鳥が知っているように  |
| Так знает человек в сатори,      | 悟っている人は     |
| Что это место определено ему.    | 居場所を解る。     |

この例えの場合では、道元は悟りの大きな意味を説いていて、悟りが人にとって空気や水のような欠かせないものであると説いていると思われるのである。

以上、私は『正法眼蔵』の第一巻「現成公案」における悟の姿を種々の自然界の譬によって明確に表現されていることをロシア語訳の詩的な軟性を生かしてロシアへ紹介したいと試みている。

- 
- 1) 「キリストの年齢」という表現があり、キリストは33才の思想の花栄のピークに死を受けた。
  - 2) ミハイロワ. S., 『三大尊行状記』「道元伝」(抄訳) 曹洞宗宗学研究第46号 2004年3月
  - 3) Августин, Исповедь, Сретенский монастырь, м, 2006, (聖アウグスチノス「告解」スレテノスキ修道院, モスクワ, 2006年)
  - 4) 日口辞典コンラド編集

〈キーワード〉 道元, 『正法眼蔵』, 悟り, ロシア

(愛知県立大学非常勤講師)